

洋四角五分)〔以上那波〕

● R. R. Getteli, *History of Political Thought*

題目は政治思想であつて政治上の制度ではない、著者は此兩者の別を特に斷つてゐるが、過去を知らんミするに「唯何をなしたか」の外に「如何に考へたか」、「如何に望んだか」を知らねばならぬ、制度は其極めて一部分のみが指示されるに過ぎない、本書は或は實現され或は夢想に

終つた政治上の信念及希望の記録であつて政治思想の起原から現代思想の傾向までを論述してゐる。但し、思想ミいふも實は時代なり國土なりの事情智的發展の段階に影響されたる思想であつて純粹思索ではない。著者は古代に於ける一般的な且顯著な特色は宗教、慣習、法律を分化し得なかつた點であるとし政治上の進歩は異なる事項の間に區別を設け各自に其の特有な地位職能を與ふるにあると説きこれを中世及近世に於ける數個の例に依つて立證し更に現代の政治問題は立法の職能は何か、如何なる範圍まで人民の生活方法、個人的習慣に關與し得るか

を決定することに依つて解決せられるとし、最後の數章は社會主義的政治思想新自然觀、國家權力の制限に關する思想を分析し且、其由つて來る所以を詳論してゐる。著者は飽くまで判官の地位を避け、批評は他に譲つてどこまでも史家たるの態度を失はず、數多の學說を客觀的に取り扱つて居つて吾人の觀るところではこの種の著作中一頭地を抜くものと言つていゝ、また各章毎に擧げてゐる參考書目も至極適切と思はれる。

● W. C. Meller, *A Knight's Life in the Days of Chivalry 1924.*

章を分つこ三十八、騎士道の起原から其の衰微までを論述してゐる。中世に於ける貴族生活の研究は著者の獨壇場であつて到底他の追隨を許さない、唯、惜むらくは戰時に於ける騎士の生活を敘述するこ三詳にして平和の生活、即ち城内の日常生活殊に騎士階級の宗教的、智的觀念に論及するこ三簡に過ぎる憾みがないこはいへぬ、又僱侶階級、下級社會の生活に至つては勿論本書の目的では

ないから之を要求するのが無理かも知れぬ、但本書の目的とする範圍に於ては悉さざるなしといつて、例へば騎士の甲冑裝束或は葬祭に關する制度、風習並に下級騎士の訓練競技に就いての記述に於ては其の含蓄ある精確なる他に比を見ない、多くの讀者には目新しいこと、信するが、著者は *Eustache Des chaulx* の詩を紹介してゐる、彼の生涯は一三二八—一四二二、殆、一世紀に亙る、詩人としては同時代のチヨースーに及ばざること遠いが其の殘した多數の作品は當時の生活を詳細に傳へるものにして貴重な史料たることが知られる。

● Pr. Smith, Erasmus: a Study of his
Life, Ideals, and Place in History 1923

E. Emerson が二十余年前にエラスムス傳を著し其の序言に曰く、「エラスムスの完全適切なる傳記は將來に俟たざるべからず、而して著者は古典の文學を究め、各種の基督教的思想に通じ、教會改革の複雑せる運動を論じ、教育者たり、道德家たり、同時に洒脫の人ならざるべか

らず云々」本書を讀むに當り如何にも首肯れ、著者は恐らくこの條件を具備する人と思はれる。著者は一九一一にルター傳を公にし、爾來教會改革時代史の研究に没頭してゐる事であるから、エラスムスの著書なり生活なりに觸れることが多かつたらう。著者の研究態度は徹底的であつて史料の吟味も綿密を極め、従つて其の叙述は如何にも確實であり信憑するに足ると思はしめる。エラスムスの博識にして勉勵、磊落にして而かも小心、批評に對しては甚敏感であつて自家の説が物議を醸すことなきや否やに絶えず留意し、従つて教會改革に對する彼の態度感想を明瞭に看取することが出来る。

但、エラスムスの生命は著作であつて著作を措いて彼の傳記はない、従つてエラスムス傳の中心は彼の名聲を掲げ且維持してゐる著書にあらねばならぬ。がこの點に著者の注意は拂はれてないやうである。彼の宗教上信念及態度を言明した名作 *Enchiridion* は二頁 *Institutio Principis Christiani* は一頁、彼の傳記を草するに當り最貴重な史料たるべき *Dissoles* は二頁を占めるに過ぎないのに *Praxis*

of Folly は一章十頁、また Colloquies の如きは三十頁を占めてゐる、最後の二書は恐らく人々に贈交してゐるがためでもあらうか。希臘文の聖書及其の拉典譯に關する論説は最傾聴するに足るを信する、唯それらの文獻に解題的註解が附してあつたならば申分がないと思ふ。

● V. Valentin, Deutschlands Ausenpolitik
von Bismarcks Abgang bis zum Ende
des Weltkrieges 1921.

本書は想像の部分が少くないこの非難もあるが論旨明快、文章流麗なためか現在獨逸で廣く讀まれてるこいふ著者は一九一五に獨逸外務省の命を受け、其の公文書を精査し、獨逸側の世界大戰責任論を起草した人、また國際聯盟宣傳の爲に活動した人である。

本書は三部に分れ、第一部はビスマルクの後繼者の事業、歐洲國際關係の逐次動搖を論じてゐるが「白耳義外交官の報告」(Schweizer Ausgabe)を重視し過ぎた點がある、該報告は他の資料に合致せざるかぎり信をおき難いこは一般

に學者の定評であるから本書の價值も危ぶまれる。第二部は一九一四の七月の危機昂奮きつた時期を記してゐるが獨逸、佛の政策に嚴評を加へたもので主に獨逸の文書に據つてゐるから之も露國側で最近に發表した文書(例へばドプロロスキ文書)に依つて訂正を要すると思ふ、第三部は大戦中の獨逸の外交であつてルーデンドルフを痛罵し、筆誅してゐる、著者に依れば獨逸外交が文官の手を離れ武官の手に歸したのが抑々致命的失敗であつてこの重大責任を荷うたルーデンドルフは其の任でない、彼は政機を解せず、事毎に失體を重ね、遂に收拾すべからざる破綻を生じた、そして社會主義者、平和論者が獨逸の軍紀を頽廢さしたミする説を論駁し、其の責任もルーデンドルフにあるこいふ、即ち獨逸人の徳性を弛緩せしめた一半の原因は久しきに亘つて中央權力に對し増加し來つた不平であるが、しかし主因は寧ろ軍事上の失敗にある、ルーデンドルフは嚴重苛酷な檢閲を行ひ、反覆して獨逸の最後の勝利を約して居つたが結局人民が欺かれたこを知るや失望落膽の極遂に自暴自棄に陥つたこ

いふにある。〔以上菅原〕

●支那古明器泥象圖説

文學博士 濱田 耕作著

著者曰く、支那の泥象は希臘のタナグラの泥象と同じく當代の大藝術と社會的生活とを反映せる小藝術なり小社會なり、此の謙讓にして可憐なる形像は之を美術的作品として愛玩するに足る可く、歴史の參考として貴重するに餘あり」云々云へる此支那古代の明器泥象は實に十數年前までは支那考古學の典籍を始め其の遺物に接するものがなかつた。然るに今や東西諸國の博物館と個人の間と收藏せらるゝもの其の數幾何なるを知らざるほどの出現を見てゐる。これ主として一九〇五年以後敷設せられた洋浴鐵道が支那洛陽附近の古墳群を縦斷するもの、所産に外ならぬものであるが其の蒐集熱は單に洛陽附近に止まらず西安其他の地方にまで及んでゐる。此等發見の明器泥象は外人にあつてはシャヴァンヌ、ラウフェル支那學者にあつては羅振王氏等の逸早く紹介さるゝも、

のがあるが其の副葬狀態を明にするものが少い。

著者は京都帝國大學文學部にあつて明治四十三年洛陽に於て若干を獲得して以來、此種を蒐集するもの百數十に越へ或は親しく發掘せる漢代墳墓のもの或は世間稀に觀るもの、少くない爲に其の主要なるものを選集して四六倍版唐本仕立の上下二冊とし上冊には精巧なる玻璃版に收むるもの約八十葉、數葉の原色版を加へ、下冊には約七十頁に互つて明器泥象の總論と例品の解説とを附されてゐる。著者の云へる「一は以て支那考古學上顯著なる遺物の一般的概念を與へ、一は以て大學所藏品の目錄たるの用に供せん」とは直に以て美術考古の資料として學界を裨益するもの鮮少ではないと確信する。總論を分ちて十の泥象の出現から説述して其の製作の動機及び次で漢、六朝、唐各代の各種明器泥象の發達と特徴とを或は石彫に或は繪畫に彫刻に類推して其の細を究め支那泥象の研究は其の最盛期たる唐代にこれに到達せんとする準備努力の時代である漢六朝のそれを考察するの要を説き、其手法の佛像彫刻と相並行するの事實を擧げ